

科学論文の剽窃を阻止するために

Plagiarism pinioned

2010年7月8日号 Vol. 466 (159-160)

投稿論文の中から剽窃・盗用を見つけ出す方法はいろいろあるが、それより何より、きちんと倫理規範を教え込むことが大前提だ。

主要な科学系出版社が、刊行中の学術ジャーナル全誌について、剽窃検出サービス「CrossCheck」を導入する方針を表明した（*Nature* 2010年7月8日号167ページ参照）。この発表は、期待感とともにある種の落胆を感じさせている。

期待感のほうは、多くの出版社が、系統的なやり方で剽窃に取り組むだけでなく、出版した論文全文を共通のデータベースで共同使用することに同意した点にある。論文データの共同使用には、各社とも保守的な姿勢を示していた。しかしそれは、この検出サービスを機能させるために、どうしても必要なステップだったのだ。CrossCheckが利用するソフトウェア iThenticate は、投稿された論文原稿を既発表論文のデータベースと照合することで機能する。CrossCheckに参加する83社は、既に2500万編以上の論文の全文をデータベースに提供した。

一方、落胆というのは、こうした予防措置が必要となるほどに剽窃が蔓延しているらしい現実だ。ある出版社が自社発行の3誌についてCrossCheckを試行した事例が知られているが、その際には、いったん受理された論文の6パーセント、10パーセント、23パーセントをそれぞれ却下せざるを得なかった。

剽窃の頻度がある程度高いと考えられる理由がいくつかあるのは確かだ。物理学プレプリントサーバー arXiv 所収の論文の一部をサンプルとした研究（*Nature* 2006年11月30日号524ページ参照）やPubMedの抄録に関する研究（*Nature* doi:10.1038/news.2008.520; 2008 参

照）では、剽窃の頻度は、かなり低かった。しかし、剽窃の真の蔓延度、剽窃の頻度が実際に増加しているのかどうか、研究分野によって差があるのかどうか、といった点に関しては、データがひどく不足しているのが現実だ。今回のCrossCheckの導入によって、こうした疑問に対する信頼性の高いデータが得られるとともに、論文の剽窃に対する強い抑止力が生まれると期待される。

ただし、編集者と出版社は、剽窃にはいろいろな種類があり、程度もさまざま、それ相応の対応が必要であることを忘れてはならない。例えばこれまでの研究から、他人の論文の剽窃よりもはるかに高い頻度で、自己剽窃つまり、自らが発表した論文中の文章をそのまま用いる行為が行われていることがわかっている。別の研究分野の読者に対して、自らの既発表論文の考え方を再提示するために自己剽窃を行うことがあり、こうした形は正当化されるケースもあるといえよう。また、すべての剽窃において、悪意のない間違いや情状酌量の余地もみられる。例えば、英語の得意でない研究者が、自分の論文とよく似た論文の冒頭部分の言い換えをしようとしたがうまくいかなかった場合などだ。

こうした事例は、剽窃検出ソフトウェアが人間の判断を助ける道具とはなっても、人間の判断そのものは代行できないことを示している。*Nature* 系ジャーナルやその他の学術ジャーナルでは、論文原稿が過去の論文とどの程度類似しているのか、経験に基づいたやり方で判断し

ている。特に総説論文中で少数の自己剽窃があったとしても、それ以外の内容が十分にオリジナリティーの高いものかどうか、また興味深い内容なのかどうか、重要な判断のポイントになる。

ネイチャー・パブリッシング・グループは、CrossCheckに参加しており、自らのジャーナルに投稿される論文原稿を使って、CrossCheck サービスを検証してきた。これまでのところ、無作為抽出された研究論文中でごく少数の剽窃例が見つかっており、「supplementary methods（方法に関する補足情報）」の部分のみで発見されることが多かった。また、剽窃は、投稿された総説論文に多くみられるため、総説論文すべてについて検査した。その結果、この傾向は臨床系の総説論文で顕著にみられたが、それでも1論文当たりの検出率は1パーセントをはるかに下回っており、ほとんどの場合、ある程度の自己剽窃であった。

剽窃を検出する手段が得られたことは歓迎すべき前進であるが、重要課題は、やはり問題の原因に取り組むことだ。近年、剽窃に関する包括的な倫理ガイドラインを採用する専門学会、研究機関、論文誌が増えており、こうしたガイドラインの多くでは、剽窃の程度の差が慎重に区分されている。剽窃と出版倫理に関しては、世界各国の研究機関、特に若手研究者のメンターである教官が、所属研究員や教え子の研究者に、世界の科学コミュニティで認められた規範を教え込むことが重要だ。 ■

（翻訳：菊川要）